



大いなる田舎飯舘村に放射能が降った

—学校教育再建・復興への取り組み—

日時：2013年1月28日（月）18：30～20：30

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール

講師：広瀬要人氏（飯舘村教育委員会 教育長）

司会：阿部治

みなさん、こんばんは。広瀬と申します。

福島県の“大いなる田舎”である飯舘村の教育長として、みなさんの前でお話させていただく機会を設けていただきまして、立教大学の関係者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

本日は、まず飯舘村がどんな村であるかをご紹介します、それが震災でどう変わったのか、そこからどうやって立ち上がろうとしているのか、という3つの柱で話を進めていきたいと思っております⁽¹⁾：スライド・資料番号、以下番号のみ表記。

■飯舘村の現状

2011年の東日本大震災で、飯舘村は地震や津波の被害はほとんどありませんでした。たまたま浜の方に行っていた村民が1人津波に流されて亡くなっていますが、ただ、東京電力福島第一原発の事故により、6,200人の全村民が、村外避難を余儀なくされました。東日本大震災の被害が大きかった岩手、宮城、福島の3県の避難者数は、総務省の調査によると、3県で34万人でした。2012年12月11日のデータですが、県の調査では、福島県の避難者は約16万人、そのうち県外は58,608人です。3県の中で県外に避難した人は、福島県だけで85%となっています。県内は93,864人です。福島県では今でも16万人もの人が故郷に戻れず、避難生活をしています。

福島県の避難者数が多いのは、原発事故の影響であることは言うまでもありません。室生犀星の「小景異情」という詩の中に「ふるさととは遠きにありて思ふものそして悲しくうたふもの よしやうらぶれて異土の乞食となるとても 帰るところにあるまじや」という冒頭文がありますが、まさに福島の人たちは今、そのような心境で故郷を離れて暮らしているのです。

福島県は、海沿いの浜通りと、県庁のある中通り、そして、今年のNHK大河ドラマ「八重の桜」の舞台になっている会津の3つの地域に分かれています。飯舘村は浜通りの山間部にある村です⁽²⁾。人口は約6,200人でしたが、震災後6,000人を割りました。将来、村に戻る時にどのくらいの人口になるかを推測していますが、新潟県の山古志村の場合は70%でした。飯舘村は条件が厳しいので、半分が戻れたらいいのではないかと話しています。将来戻れるようになるかどうかはわかりません。戻っても老人だけの村になる可能性も十分考えられます。

世帯数は約1,700世帯、震災後は約3,200世帯になっています。人口は減っているのに世帯数が増えているのは不思議に思いませんか？ これには2つの理由があります。1つは避難先の住宅事業です。仮設住宅は4畳半2部屋くらいしかあ



広瀬要人（ひろせ・かなめ）

1947年、福島県南相馬市（旧原町市）生まれ。飯舘村教育委員会教育長。1972年、國學院大學文学部文学科卒業。藤嶺学園藤沢高等学校を経て、福島市立信陵中学校、茂庭中学校、渡利中学校、相馬市立中村第二中学校、浪江町立浪江中学校で国語教諭として教鞭を執る。1992年から広野町立広野中学校、相馬市立向陽中学校、中村第一中学校の教頭、2000年から飯舘村立白石小学校、相馬市立磯部中学校、南相馬市立鹿島中学校の校長を歴任。2008年、南相馬市立ひがし生涯学習センター指導員。2009年より現職。



大いなる田舎飯舘村に放射能が降った

りませんので、飯舘村の2世帯、3世帯の家庭は仮設住宅に入りきれません。そのため、家族が離れざるを得ませんでした。もう一つが東電の補償です。第1回目の補償は世帯ごとだったため、世帯を分けたほうがいいということで、世帯分離に拍車がかかりました。そういった経緯で、現在は3,200世帯をこえています。

主な産業は、米、野菜、花卉、和牛、石材等でした。和牛は、飯舘牛としてまさに売り出しをしていた時期だったのです。3,000頭ほどいしましたが、すべて処分されてしまいました。震災前、飯舘牛は東京シティマラソンのマスコミ向けのお弁当の食材にも使われていましたが、残念ながら幻の飯舘牛になるのではないかと考えています。一部、牛を県外に避難させて飼育している人もいますが、飯舘村以外で飼育した牛は飯舘牛とは言わないのです。

■日本で最も美しい村の理念“までい”

飯舘村は、「日本で最も美しい村」連合に加盟している村です⁽⁴⁾。「日本で最も美しい村」連合は、小さくても輝くオンリーワンを持つ農山村が、自らの町や村に誇りを持ちながら自立した町づくりをしていこうという連合体で、現在は全国で49町村が加盟しています。飯舘村は2010年に加盟しました。審査会には私も参加して、マイナス14℃の夜、非常に寒かったのですが、古い民家で星空を眺めながら、おもてなしをしました。村にはたくさんのすばらしいものがありますが、このとき村のみなさんは、飯舘村の星空を売りにしたのです。

村づくりの大事な理念は「までい」です。これは「まで」（真手）という古語が語源になっている方言です。「真手」には「手間暇惜します」「丁寧に」「心をこめて」といった意味があります。名刺を渡す時やお茶を出す時に、片手ではなく両手で出します。このような「もろて」（両手）という意味もあります。「時間をかけて」「手間暇を惜します」「心をこめて」村づくりをしていこうという理念です。

①人と地域の繋がりを“までい”に、②からだと大地を“までい”に、③家族の絆を“までい”に、④「食」と「農」を“までい”に、⑤人づくりを“までい”に、という“までいな村づくり”を推進しています⁽⁵⁾。

飯舘村を写真でご紹介します⁽⁶⁾。こちらは村の各地にある「種まき桜」のひとつです。大変きれいな風景ですが、この桜を目安に種蒔きを始めます。飯舘村に長泥という地区がありますが、ここは現在、帰宅困難区域になっておりまして、自由に入れなくなってしまいました⁽⁶⁾。長泥地区の桜は毎年、見物客で賑わうところです。村内には2カ所、天然記念物として水芭蕉群が保存されています。雑草に弱いので、なんとか消滅しないように、手入れをしているところです⁽⁷⁾。

これは「ほんの森いいたて」という村営の本屋です⁽⁸⁾。全国には公設の本屋が3カ所あるのですが、村営はここだけです。図書館も本屋もなかったため、1995年にJPIC（一般財団法人出版文化産業振興財団）の支援を受けて立ち上げた本屋です。立ち読みは歓迎ですが、長く読んでいると子どもたちも疲れるので椅子を用意してあり、ここを舞台に読書活動を推進しています。



2010年には、読書年だったこともあり、全国に眠っている絵本を譲ってほしいと、新聞やインターネットで呼びかけて絵本を集めるという事業がありました。1年間で57,000冊集まり、村内にミニ図書館をつくって、子どもたちや村民に自由に見てもらおうと企画した矢先に、東日本大震災が発生しました。体制づくりをしましたが、機能しないまま避難してしまったという事業です。

全国から寄せられた絵本の一部は、中学生に翻訳してもらい、飯舘村で寄贈したラオスの学校で教材にしてもらっています。お互いさまという事業ですね。2010年には、優良な読書団体として、文部科学大臣の表彰を受けました。2013年1月31日に、オーストラリアから移動図書館車の寄贈がありますので、避難先における読書活動の再構築をしていこうと準備をしています。

村民の癒しとなっている村民の森「あいの沢」です⁽⁹⁾。5年間かけて、村で愛の句を募集しました。黛まどかさんが選者になってくださいました。その入選作を、村の白い御影石に彫ってあります。自分の句を見たくて全国から訪れる方も多いです。向こうに見えるのが浮き橋です。

まさに飯舘村らしい風景です⁽¹⁰⁾。さすがに飯舘村も機械で田植えをしています。これは浮き苗、倒れている苗、あるいは機械でミスした苗を手直しているところです。根気のいる作業ですが、飯舘村では差し苗と呼ばれており、腰に苗を入れて1本1本差し苗をしているのです。

相馬地方は、二宮尊徳の第一の弟子である高田高慶の出身地で、高田高慶は二宮尊徳の娘を嫁にしました。飯舘村には二宮尊徳の教えが行き渡っており、江戸時代に灌漑用水池が沢山作られました。これは池に生えている蓮です⁽¹¹⁾。

飯舘村らしい秋の芸術的な田園風景です^(12,13)。藁は牛の飼料や堆肥になります。今は牛に食べさせるわけにはいかなくなりました。

これは、はやま湖です⁽¹⁴⁾。この水は相馬地方の飲料水・農業用水になっています。たいへんきれいな湖です。

飯舘村らしい冬の風景ですね^(15,16)。今では、放射線量が半分くらいになりました。冬は、雪に遮へい効果があるから線量が下がるのだそうです。こちらは、しみ大根づくり⁽¹⁷⁾。大根を寒気にさらすと甘みが増すので、寒ざらし大根・しみ大根をつくり、農家の保存食にしています。そして、子どもたちのソリ遊びの場面⁽¹⁸⁾。これらが、飯舘村の震災前の風景です。

■飯舘村に放射能が降った

次に、震災直後の飯舘村についてお話します⁽¹⁹⁾。2011年3月11日午後2時46分、大きな地震が起きました。私は教育長室にいましたが、とても立っていられないほどの揺れでした。マグニチュード9、飯舘村は震度6強でした。飯舘村でも蛍光灯のカバーや棚のものが落ちてくるという状況でしたので、海岸のほうはもっと揺れていたと思います。

村としては、直ちに災害対策本部を設置しました。夕方には福島第一原発から半径3km以内に避難指示、3~10kmの人に屋内退避指示が出され、翌3月12日には、第一原発1号機で水素爆発、その日の夕方には、半径20km圏内に避難指



大いなる田舎飯舘村に放射能が降った

示が出されました⁽²⁰⁾。そして3月13日、南相馬市や双葉郡から700人近くの人たちが避難してきました。その頃は、飯舘村は原発から30~40kmほど離れているので大丈夫だろうという思いが、近隣の市町村にありましたので、村内3カ所に避難所を設置して、避難してきた人たちの対応に当たりました。これは役場内に設置された対策本部です⁽²¹⁾。

3月14日のお昼頃、第一原発3号機で水素爆発が起こりました⁽²²⁾。村への避難者は1,000人近くに増え、避難所を増やしました。

3月15日、第一原発2号機で水素爆発、4号機で火災発生⁽²³⁾。総理大臣が記者会見をして、原発から10km圏内に避難命令、20~30km圏内には屋内退避命令が出されました。私の自宅は南相馬市にありますが、原発から25kmくらいですので屋内退避圏でした。飯舘村の空中線量は44.70 μ sv/hを記録していました。線量計は少なかったのですが、いくつか村にもありました。この線量がどういう意味を持っているのか、その時はまったくわかりませんでした。

避難者は1,100人になり、避難所を5カ所に増やしています。3月15日は雨が降り、雪も降りました。雨が降り、雪が降ったことで、飯舘村が汚染されたのです。私たちは放射能が飛んできているということがわからず、目にも見えず、匂いもしなかったので、雨や雪に濡れながら、炊き出しをして、避難者の方々の対応に当たっていました。

草野小学校に設置された避難所のスナックです⁽²⁴⁾。奥のほうに「ご卒業おめでとうございます」という看板が見えますが、3月11日は中学校の卒業式が終わったばかりでした。幼稚園は3月18日、小学校は3月23日を予定しておりましたので、幼稚園と小学校の卒業式はできなかったわけです。卒業式の準備をしていた看板を見ると心が痛みます。

落ち着いたら、幼稚園と小学校の卒業式をやろうと、卒業証書は、私がお預かりしました。何ヵ月か経つと、保護者の方が「卒業式をやってください」と訴えてきたのです。「気持ちの整理ができない」と。幼稚園の年長組は小学生になりましたし、小学6年生も中学1年生になっていましたが、入学しても気持ちの整理がつかない、けじめがつかないから、卒園式・卒業式をやってほしいという要望を受け、9ヵ月遅れて2011年12月25日に行いました。NHKと俳優の伊勢谷友介さんたちの協力で実現され、これは報道もされたので、ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。

3月16日、飯舘村の放射線量は38.70 μ sv/hでした⁽²⁵⁾。この頃になると、飯舘村から避難する人も増えてきました。飯舘村に避難してきた人が、再避難をするわけです。避難者は887人に減りました。

3月17日、村としてもこのままではダメだということで、最悪のケースを考えて、浜のほうから避難してきた人たちや村民の避難希望者を、栃木県の鹿沼市に避難させることを決定しました。県の斡旋で栃木県と話し合いをして、鹿沼市で2,000人を受け入れてもらえることになりました。これは避難する時の様子ですが、2回に分けて、鹿沼市に509人避難しました⁽²⁶⁾。私は団長として鹿沼市に行っていました



が、非常に手厚いおもてなしをしていただき、今でも感謝しています。

これは途中でスクリーニングを受けた時の様子ですが、ガイガーカウンターで全身の放射線量の測定をしました⁽²⁷⁾。一番汚れているのが靴なのです。靴を徹底的にその場で洗浄して、それでも放射線量が高い場合は靴底をナイフで削ったりしていました。それでも駄目な靴は没収されて、ビニールの靴のカバーのようなもので鹿沼市に避難した人がいました。

■学校再建への取り組み

それでは、学校の再建をどのように進めて来たかをお話します⁽²⁸⁾。

私は、2011年3月24日に鹿沼市から戻りました。児童生徒および教職員の安全と健康を担保しながら、正常な学校経営をするためにはどうすべきか、村長と話し合いまして、村外に幼稚園、小学校、中学校を移設しようという方針を決定しました。被災市町村の中ではいちばん早い結論だったと思います。

この時に、学校移設の3条件を設定しました⁽²⁹⁾。1つは、「飯舘村に近く、放射線量の低い村外の地域にすること」。全村避難ということは想定されていませんでしたので、大人は村外から村に通わせて仕事をさせようと考えていました。村外に避難させて、子どもを親元から通わせることにしよう。これは、親と子どもを切り離せば、親も子どもも精神的に不安定になって、新たなリスクが生じるであろうという思いがあったからです。

全国から、施設・設備を提供するので、子どもを疎開させてはどうかという提案もいただきました。非常にありがたいご提案でしたが、1つ目の条件と同様、子どもを親元から離すことは新たな教育問題を生むだろうということで、「子どもを親元から通わせること」を2つ目の条件としました。

3つ目は、「子どもをバラバラにしないこと」です。子どもがバラバラになれば、大人もついていきますから、子どもはバラバラにしないようにしようと決めたのです。被災市町村の中では、避難先の学校に入るようにと指導したところも多かったのですが、飯舘村と大熊町は町村で設置した学校に通ってほしいと案内をしました。今、その違いが出ています。飯舘村は当初、7割くらいの子どもが残っていました。大熊町も会津に学校を設置しましたが、6割くらいの子どもが残っています。しかし、他の市町村は避難先の学校に入るように指導したため、今、学校を再開してもなかなか子どもが戻ってこないという状況があります。

このように、学校の移設に取り組み始めました。この条件に合うのが、隣町の川俣町でした⁽³⁰⁾。川俣町の双葉郡に近い部分は放射線量が高いのですが、それ以外は線量が低かったです。0.1~0.2 μ sv/hほどの状況でしたので、川俣町に幼稚園、小学校、中学校の移設を引き受けてもらえないかをお願いをしたところ、快く引き受けてもらうことができました。

幼稚園は、川俣幼稚園と富田幼稚園に、それぞれ2部屋ずつお借りして、飯舘村の2つの幼稚園の子どもたちを入れました。小学校は、川俣中学校に11教室お借りして、飯舘村の3つの小学校の子どもたちを入れたわけです。また、県立川俣高校



大いなる田舎飯館村に放射能が降った

に5教室お借りして、中学校の子どもたちを入れました。学校を村外に移設するのは大変な事業で、あちらこちらで説明・許可・了解と、かなりのエネルギーが必要でした⁽³¹⁾。まずは村の教育委員会、幼小中学校長会、議会、村のPTA連絡協議会、全教職員や保護者にも説明会を開きました。そして、引き受けていただく川俣町の教育委員会にもお願いをしに行きました。県の教育委員会にも行きました。

こういうことを丁寧にやっていると、後で様々なトラブルが出るのです。保護者から意見、要望等がたくさんありました⁽³²⁾。もっともな意見ばかりでしたので、ひとつひとつ丁寧に対応していきました。中学3年生のお子さんを持つ親御さんには、進学先の高校が福島市と学区が同じエリアになるので情報を提供してほしいと言われました。浜通りよりも福島市のある中通りのほうが、レベルが少し高いことを心配されていたのです。

4番目にあるように、スクリーニング、甲状腺検査、健康診断を定期的を実施してほしいという要望もあり、これは今も続けています。5番目は就学援助制度の充実です。基本的に飯館村の場合には教育にかかるお金はゼロに近づけようと取り組んでいますが、このことは後でお話します。

これは、夜に保護者会を行った時の写真です⁽³³⁾。カメラが入っていますが、この当時はどこに行ってもマスコミに追いかけていましたね。NHKだけでも4つのグループが入っていました。震災前には、マスコミが来るようなことはあまりなかったのですが、震災を機にマスコミに晒される機会が増えました。

■避難先での学校運営

そうして、いよいよ避難先で学校をスタートさせたわけですが、例年よりも2週間ほど遅れました。学校再開にあたって、教育長として、教職員のみなさんにメッセージを出しました。

「避難中なのでできないこと、不自由なことがたくさんあります。でも、ないもの探しはやめよう。今だからできること、今だからやらなければならないことを創意工夫しよう。減点法の教育ではなく、加点法の教育をしよう。アラ探しの教育ではなく、宝探しの教育に努めよう。努力はすべての扉を開くのです」

これは先生方に行き渡り、教育長の呼びかけに応じて活動してくれました。

4月21日、川俣町で新学期をスタートしたのですが、翌日22日に、飯館村が計画的避難区域に指定されました⁽³⁵⁾。1ヵ月を目安に全村避難してほしいと言われたのです。想定していなかった事案でしたので、村には動揺が広がりましたが、4月22日から1ヵ月後に6,200人の村民が村外に避難することになったわけです。

スクールバスで避難先から登校している写真ですが、このスタイルは、夏まで続きました⁽³⁶⁾。マスクをつけて、帽子をかぶって、長袖のシャツを着て、真夏でもこういう服装でした。どこかで切り替えなくてはと、8月には夏服になりましたが、まだまだ放射線への警戒度が高いことはわかると思います。

先ほど、「こんな時だからできる教育、こんな時だからやらなくてはならない教育があるのではないか」という話をしました。3つの小学校が入りましたので、「1



つの教室を3つに分けて、それぞれの小学校ごとに授業をしてください」、「間に衝立を立ててやってください」といった、ひどい指導もありましたが、特別な時には特別な対応があってもいいのではないかと思い、「1人の先生がメインとなり、2人の先生がサブとなって、同じ教科を同じ時間にやってください」と言いました⁽³⁷⁾。同じ時間帯に、同じ科目の授業を行うことで、1学級として授業ができるわけです。

これは、県の指導とは違うのですが、文部科学大臣が訪問した時に、「県の指導ではないのですが、私の判断でやらせていただきました」と言うと、「いいじゃないですか」と評価していただき、その後は正々堂々とやらせていただいています。こういった工夫が現場では行われているのです。

川俣町に学校を移設すると同時に、間借りではなく、自前の校舎を建てる準備をしていきました⁽³⁸⁾。2012年の4月5日には、小学校の仮設校舎が川俣町にできて、新しい校舎でスタートを切ることができました。4月9日には、福島市飯野町に幼稚園ができてスタートしました。8月27日には中学校の仮設校舎ができてスタートしています。預かり保育の施設も8月27日に飯野町に完成しました。1年から1年4ヵ月くらい、間借りの生活でしたから、グラウンドも体育館も自由に使えず、思うような教育ができなかったのですが、ようやく自前の我が家を持つことができるようになったのです。

これが幼稚園で⁽³⁹⁾、こちらが小学校です⁽⁴⁰⁾。真ん中にある2棟が小学校です。右側が特別教室、左側が体育館、狭いながらもグラウンドがあります。先生も子どもたちも、自分たちの学校で教育ができるという喜びを本当に実感したようです。この時の喜びようは大変なものでした。

校舎は国の補助事業で建てましたが、体育館が国の補助の対象にならなかったのが非常に困りました。体育館のない学校は考えられなかったのが、県や国にお願いしたのですが、許可が出ず、何とかならないかと粘りに粘って、県が耳元に囁いてくれたのが、日本赤十字社でした。日本赤十字社にお願いして建てたのが、左側の体育館です。体育館だけで約2億円かかりました。様々な方のご協力があった、こういう形になったのです。

これは中学校です⁽⁴¹⁾。長年使っていなかった川口電機の工場をリニューアルして、立派な学校になりました。中学校の事業を進めた時には、体育館も補助の対象にいただくことができたのです。幼稚園も小学校も中学校もそうですが、約6,000㎡あり、除染をしなくてはならないため、約10cmの土を削り取って新たな土を入れました。現在は0.2μsv/hほどです。福島市の学校は3~5cmほどの土を削り取りましたが、まだ処分場がないため、校庭の一角に穴を掘って埋めて、そこにシートを被せている状況です。福島市に建てた飯館中学校も穴を掘って埋めようかと思っていたところ、地域の人たちから「校庭に埋めてもらっては困る」と反対があり、持っていくところがなかったのです。「トンパック」という1t入る大きな袋で、1,500袋も出ました。土を持っていく場所がない、しかし子どもたちは新しい学校に入りたくて待っているという状況の中、やむを得ず、掘削した土を福島市から飯館村に運び、現在、野球場に仮置き場をつくって保管しています。



大いなる田舎飯舘村に放射能が降った

後に中間処理場ができれば、そこに持っていく計画になっています。

2011年度と2012年度の児童生徒数の推移です⁽⁴²⁾。小さな子どもには放射能の影響が強いということで、幼稚園児の数は半数近くになっています。就学率をみると、小学校は2011年度が71%、2012年度は63%まで減りました。中学校は2011年度が83%、2012年度は68%です。全体では、2011年度が71%で、2012年度は61%です。新年度である2013年度の集計をしていますが、60%を割り58%ほどになる予定です。絶対数も減っていますが、約6割の子どもたちが村で設けた幼稚園、小学校、中学校に通っています。これは被災した市町村の中では高いほうなのです。6割ほどの生徒を村の学校に通わせる努力はなんとか続けていきたいと考えています。

■飯舘村の学校教育の課題

今、飯舘村の学校教育の課題は色々ありますが、3つにまとめてみました⁽⁴³⁾。

1つは命と健康を守る教育。これは最善を尽くしていかなければなりません。放射線教育を飯舘村でスタートしました。放射線に対する考え方がたくさんあり、非常に難しいです。検証に検証を重ねて、放射線教育の計画書は2012年4月にできましたが、スタートしようとした矢先、先生たちから70項目にわたる不安、疑問、質問等が出されました。このまま授業に入るわけにはいかないということで、夏休みにすべての先生たちに参加していただいて、2日間の放射線教育に関する研修会を開き、ようやく3学期から放射線教育に入ったところでした。安心であるとか、大丈夫だとか、そういう言葉は使えません。色々配慮し、2人のチームティーチングで行い、アドバイザーとして専門家も付けています。そういった体制で放射線教育を進めています。飯舘村だからやらなくてはならない教育だと思っていますが、放射線教育は全国で取り組む必要のあるものだと感じています。放射線教育はローカル教育であってはなりません。

体力の向上も必要です。被災後、子どもたちの体型が変わり、太りました。小中学校のすべてのクラスの平均体重が、全国平均を上回ったというデータが発表されました。これには2つの理由があります。1つ目は外に出ることが少なくなったこと。運動不足です。2つ目は食生活が変わったこと。福島市に避難した人は非常に便利になり、コンビニ等にも頻繁に行くようになったのです。食生活が変わり、運動不足になったことは、飯舘村が取り組まなくてはならない教育の課題の1つとなっています。

2つ目の課題は、教育環境の整備です。幼稚園、小学校、中学校、そして預かり保育もできましたが、整備は行き届いていません。体育館を例にすると、この体育館は天井が鉄板ですので、夏になると鉄板が熱せられて、中は40℃くらいになります。とても体育をできるような状態ではないのです。そのため、2013年度の予算に冷房装置を請求する予定です。それ以外にも、給食は隣町の伊達市にお願いして、村の学校まで運んでもらっていますが、輸送に1時間かかるのです。四角い



豆腐も丸くなってしまうような状況で、給食の温度も下がってしまいます。そのために、村独自の給食センターの建設に着工しました。2013年6月頃から、自前の給食センターで村の味を子どもたちに提供できるかなと思っています。施設・設備の一層の見直しをやっていくべきだと考えています。

また、子どもの99%は、避難先からスクールバスで通園・通学をしています。3歳の子どもは、入園当初はまだオムツをはいている子もいますので、オムツを持ってスクールバスで幼稚園へ通うということもあります。約1時間～1時間半かかります。現在、村のバス8台とチャーターした民間バスの計14台でスクールバスを運行しています。2013年度から1時間以内で避難先から幼稚園や学校に來られるような運行にしようと、現在コースの変更を考えていますが、非常に難しいものです。学校を避難先に持っていか、避難先を学校に近付けるか、どちらかなのですね。現在は、避難先の住宅を学校の近くに建て、子育て世帯を中心に入っただけのように計画しています。ちょうど明日、避難先の住宅を建てる土地を購入するかについて議会が開催される予定です。スクールバスの見直しは、喫緊の課題になっています。

就学援助制度の一層の充実も重要です。望んでこのような状況になったわけではありませんので、村でもできる限り、教育にかかる費用を軽減していこうと、幼稚園、小学校、中学校の費用を、2013年度から限りなくゼロに近づける就学援助制度の充実を図っているところです。たとえば幼稚園ですと、保育料、給食費、教材費などがあり、国の就学援助制度もありますが、これを踏まえながら、村独自の就学援助制度をつくっていかうと、現在取り組んでいます。

3つ目の課題は、家庭・地域の教育力の再構築です。飯舘村のひとつの売りは、自然が豊かであることですが、家庭・地域の絆の強さも挙げることができると思います。震災を契機に世帯ごとに分かれまされたので、家庭の絆が崩れ、地域の絆もバラバラになってしまいました。学校の教育力の向上と同時に、家庭・地域の教育力の向上も非常に大切なのです。これが両輪になりますから、両方あってこそ、教育の充実を達成することができるわけです。家庭・地域の教育力が期待できるものではなくなってしまう中で、今はようやく落ち着いてきましたので、避難先で新たな自治組織を立ち上げるところも増えてきました。そういった組織と協力しながら、地域からも家庭からも子どもたちを支えていただければと願っています。もちろん学校も一生懸命やります。避難先における家庭・地域の教育力の再構築は2013年度あたりから取り組んでいきたいと思っています。

■原発事故からの学び

原発事故から、何を学んだのか。振り返ってみると、色々と学ぶことの多い2年間でしたが、とくに「幸せって何だろう？」と、みんなで議論することが多かったように思います⁽⁴⁴⁾。結論としては、普通の、当たり前な生活ができることが幸せなのだ。家族と一緒にいられて、水も飲める、空気も思う存分吸える、自分がつくったものを食べられる、そういう普通の何気ない生活の中にこそ、幸せがあるのだ



大いなる田舎飯舘村に放射能が降った

ということが、みんなで出した結論だったように思います。

2つ目に、成熟した社会の生き方をもう一度、考え直す必要があるのではないかとことです。大量生産、大量消費、モノの豊かさを追いつけてきましたが、日本のように成熟した社会では、もう少し精神的な豊かさを求める生活に切り替えていくべきではないかと思っています。今回の震災を通して、飯舘村の村づくりの理念である「までい」というものが、まさに今必要であるということを実感しました。

3つ目に、教育の偉大さを再確認しました。とくに避難した人たちが忍耐強く、秩序正しく物資を受け取る。ガソリンスタンドに並ぶ。外国のメディアが驚いていたという話はみなさんご存じかと思いますが、まさにそうでした。ガソリンや灯油が不足していた時に、長蛇の車の列ができました。ですが、決してパニックにはなりません。この民度の高さは教育の成果なのではないかと考えています。

4つ目に、エネルギー政策を見直す必要があると思います。再生可能なエネルギーに転換していく必要があります。福島県は原発ゼロを議会で決議いたしました。政権が変わったので少し心配な面もありますが、再生可能なエネルギーに転換していこうと県として決しましたので、全国的にもそういう方向でいくべきです。

5つ目に、エネルギーも地産地消であるべきです。自分で使うエネルギーは自分で生産する、地方に危険なもの、望まないものを押し付けて、その恩恵を都会で享受するという社会の構造を見直していかなければなりません。

■これからの福島

飯舘村に来てくださる方々から「なにをお手伝いすればいいですか？」という質問を受けますが、そのたびに私は、「被災者の立場になって考えてください。被災者を正しく理解してください。マスコミだけではダメですよ。できれば自分の耳、目、足で被災地を確認してください。正しい理解ははじめ、差別、風評被害をなくす原点です」とお話ししています⁽⁴⁵⁾。被災した当初は生活支援が必要ですし、これから我々も同じような被災をした人たちには本気になって恩返しをしていきたいと思いますが、今、思うことは、生活支援より自立支援が大事だということです。いつまでも生活支援を受けていると、被災民は依存してしまい、自立心がなくなってしまう。これは決して良いことではありません。生活支援から自立支援へ切り替えていくべきではないかと思っています。

2011年度の全国高等学校総合文化祭が、福島で開催されました。福島県内の高校生からメッセージを募ったのですが、良いメッセージがありましたので、これを読んで終わりとさせていただきたいと思います⁽⁴⁶⁾。

「福島に生まれて、福島で育って、福島で働いて、福島で結婚して、福島で子どもを産んで、福島で子どもを育てて、福島で孫を見て、福島でひ孫を見て、福島で最期を過ごす。それが私の夢なのです。あなたが福島を大好きになれば幸せです」

下から2行目の「それが私の夢なのです」。それが、私の願いであり、県民の願いではないかなと思っています。

質疑
応答

質問者① 飯舘村で放射線教育をしているというお話がありましたが、どのように子どもたちに伝えていく方針なのか、こういった人たちと共に活動しておられるのかをお聞かせいただければと思います。

広瀬 放射線教育は難しいというお話をしましたが、狙いは2つありまして、1つは子どもたちに放射線、放射能に対する知識を身に付けさせようというものです。2つ目は、低放射線量の中で子どもたちが暮らさなければならない状況の中で、危険な場所は避ける、一種の生き延びる力を身に付けさせようというものです。この2つの狙いで放射線教育に取り組んでいます。

2012年度版として、「放射線教育指導計画」をつくりました。文科省から出た補助教材もありますが、あれは全国どこでも使える内容になっていますので、飯舘村としては、地域化を図るためにそれぞれの小学校、中学校の先生、アドバイザーの先生に入ってもらって、つくったものです。あえて年度を入れたのは、2013年度にもう1回見直しをしようという意味が込められているからで、現在、改訂版の作成を進めています。アドバイザーは東京医療保険大学の伴信彦教授です。先生方の研修会、指導計画の作成にも関わってもらっています。

質問者② チェルノブイリなどの原発被害は、正しく報道され、正しく伝わっているものなのでしょうか？ 正しい認識がなければ、どこがダメだ、あれがダメだとバラバラになってしまうと思うのです。そういったものを貫くのが、科学的な真理であり、それに反すれば同じ事故が起こると思います。私もかつて、兵庫県のある場所で工場を見てほしいと頼まれて測定したのですが、そこでは「少し間違えると爆発しますよ」と、すぐに対策を立てるように話をしたのです。ところが、その3ヵ月後に爆発事故が起こり、人が20m飛ばされて即死でした。実験までして見せても、みんなわかったと言っても、実際にやらないとそういう事故になるのです。原発事故はスリーマイル島でも各国でありましたが、それを伝えないのが、日本の政治や経営者なのだと思います。かつて日本の鉱山でも、三井の夕張などで多くの方が亡くなりました。そういう時に通産省などが真剣に聞いていました。今の役人がどれだけ真剣に取り組んでいるのか、そのあたりを非常に疑問に思います。そういったことに関してはいかがでしょうか。

広瀬 たいへん難しい質問です。これはマスコミも含めて我々もそうですが、放射能や放射線に関する知識はほとんどなかったのです。シーベルトもシートベルトも区別がつかないところからスタートしているわけですから。でも、震災以降、放射線に関する知識を学習する機会がかなり出てきたのかなと思っています。ですから、これからも問題はありますが、過去の事例等も含め、放射能や放射線につい



大いなる田舎飯舘村に放射能が降った

て学ぶ機会をつくって、正しく放射能や放射線を怖がる努力をしているのが、今後の課題だと思っています。

阿部

最後に出された、福島の高校生のメッセージがありました。2012年11月に講演して下さった天野和彦さんのお話（本書p.5～34）でも、ある女子高生が「教科書も含めて学校に全て置いてきてしまった。だから、それを取りに行くことが私の夢だ」と言っていたと聞きました。先ほどのお話もそうですが、切ない気持ちになったことを覚えています。

地域の絆が絶たれ、避難する中で新しいコミュニティができ、世代や横のつながりも切られていってしまう。本来あった地域の絆がなくなることで、教育力を含めた問題ということで、再生していこうと活動していらっしゃるといってお話がありました。避難されて色々な場所に住んでいることで分断された絆が、自主的な組織が生まれることで回復してきているということも、もう少し詳しく伺えればと思います。

広瀬

地震・津波の場合、この問題を解決する時には一致団結して取り組めるのです。しかし、原発事故の場合は、兄弟同士でも、親子でも、夫婦でも意見が分かれてしまう面があります。ましてや地域や村全体となると、絆はズタズタに分断されてしまったのが現実です。混乱期はそうでしたが、情報が村民にも行き渡ってきて、学習もしていますので、ようやく落ち着きを取り戻してきました。まだまだ6,200人の村民が一丸となって、というところまでは行きませんが、ある程度のまとまった方向性はできているのが現状ではないかと思っています。

阿部

放射性物質は目に見えるものではないので、感覚にはバラつきがある。私も福島から避難されている方々からお話を伺ってきました。東北には、母子避難者が多いのです。ご主人だけ福島に残って、非常に距離がある。ご主人が奥様と子どもの元に通ってくるのですが、だんだん頻度が少なくなってきたり、なぜ戻ってこないのかという面もあります。避難すべきだという人もいるし、そうでない人もいるという中で、どんどん意識の格差が広がってくる。あるいは一時、外に避難されていた人が福島に戻ると、「あなたは福島を捨てていったじゃないか」という形で絆が絶たれてしまうこともあります。本当に二次、三次、四次被害のようなものです。

広瀬先生ご自身も当事者ですが、それ以外にも、いわれのない差別があり、深く浸透していく面もあります。そういう中でジレンマもあると思いますが、放射性物質に関して、今のライフスタイルという視点で見れば、私たちも当事者です。地方に原発をつくって栄えてきた東京という意味では、福島県の問題も、まさに当事者だと言えます。そういう私たちがすべきこととして、先ほど、「正しく理解してほしい、見てほし



い]という言葉がありました。東京で暮らす私たちの中には、福島の内容を見ないようにしよう、過去のことだと思ふ人たちが増えてきているように思ふます。この差についてはどのようにお考えでしょうか。

広瀬

福島県には200万人の県民がいますが、現在、16万人の県民が避難しているわけです。望んで避難しているわけではないので、将来は福島に戻ってくるだろうと思ふしていますが、避難先で支えていただきたいという思ふがあります。200万人の県民が一生懸命、原発と戦っているのだと、放射能と戦っているのだという姿を示していくことが必要なのかもしれません。我々は福島県から逃げ出すわけにはいきません。福島県で生きていく覚悟でいるわけですから、県民ががんばっている姿を伝えていくことが大事だと思ふしていますので、その姿を応援していただく、理解していただければとお願ひしたいです。

大丈夫かどうかと聞かれても、専門家ではないので断言はできませんが、大丈夫だろうと思ひながら生活しているのが現状です。悲しい話はたくさんあります。井伏鱒二の『黒い雨』ではありませんが、婚約が破棄になったとか、福島県から納品された花火が打ち上げられなかったとか、橋げたが使われなかったとか、福島でやった結婚式の引き出物が高速道路のサービスエリアのゴミ箱が満杯になるくらい捨てられていたとか……。そういう話を聞くと、非常に悲しくなります。きちんと福島の現状を理解していただくことが、福島を支援していただくための大きなエネルギーになるのではないかと思ひています。

阿部

「正しく怖がる」ということを、2011年にあちこちでお話したことがあるのですが、放射線教育のここまでは明らかだけど、ここからはわからないという分野もあるわけですね。政府が言っているように、どこまで安全なのかということはひとまずおくとして、「正しく怖がる」ための教育は必要だと思ひます。そういうことを進めていく中で、エネルギー政策において日本に原発はいらないということを、福島の方々が言っていく。同時に福島県以外にも原発はいらないという方が大勢いるわけで、連帯して活動していくべきだと思ひます。

同時に、福島で暮らしている子どもたちは成長していきます。前向きに育ててもらえると嬉しいのですが、子どもたちがなぜ自分は福島で暮らしているのだろうかという疑問を持つようなことがあった時に、どうやって前向きになってもらうために関わっていけばいいのでしょうか？

大人として、どうやって福島の子供たちに関わっていけばいいのでしょうか？

広瀬

今、福島に残っている子どもたちは、生活する場所を選ぶことができません。大人が起こした事故にどう関わっていくかという質問ですが、1つは徹底的に除染をしていくべきだろうと思ひています。福島県



大いなる田舎飯舘村に放射能が降った

は広範囲で汚染されていますが、特にそういう地区の除染を徹底してやるべきです。飯舘村の場合には居住地区は2年、田畑は5年、山林は20年かかると言われています。

2つ目は子どもの健康管理です。これも大人の責任できちんとやっ
ていかななくてはなりません。甲状腺検査の結果が新聞で公表されてい
ましたが、幸いにも今すぐ問題になるような数値ではなかったので安
堵しています。しかし、いずれにしても内部被ばく検査を継続して行っ
ていく必要があります。

3つ目は、知識が足りない、あるいは、間違った知識による差別もあ
るので、全国民で正しい知識を学んでいく放射線教育が必要だと思
います。福島のローカル教育ではなく、全国民が同じ土壌で、同じ知識を
放射線について学習することで、いわれなき差別、いじめ、風評被害
を防ぐことができるのではないのでしょうか。この3つが大人としてやら
なくてはならない課題だと思っています。

阿部 原発事故から学んだこととして、本当の幸せとは何か、成熟社会の
生き方、教育の偉大さというお話がありましたが、こういったことを飯
舘村から発信していくとしたら、どういった形が考えられますか？

広瀬 原発事故は有史以来の大きな事故です。日本の歴史の中で、このよ
うな事故は皆無だったと思います。ですから、ここから学ばない手は
ない、これを活かさない手はないと考えています。どのように発信し
ていくべきかというお話ですが、生き様を色々な機会を設けて伝えて
いくということになるのではないかと思います。ただ無闇にやるので
はなく、専門家のアドバイスを受けながら、そして、こういう立ち上がり
方をしているという姿を伝えていければと思います。昔と違って、マス
コミや情報機関が発達していますので、そういうものを利用しながら、
福島県の生き様を全国に発信することが必要です。

阿部 冒頭で見せていただいた飯舘村の写真ですが、会場の方々もおそ
らく万感の思いを抱いて見られたと思います。写真を見ながら思うの
は、福島を除染を含めた取り組みをやっていくと同時に、二度とこの
ような事故を起こさないことを共通の認識として持つておくことが必
要だということです。これからも、福島を風化させない、原発事故を風
化させないという取り組みを行っていきたいと思います。広瀬先生、
本日はありがとうございました。



資料

大いなる田舎 飯舘村に放射能が降った

学校教育再建・復興への取り組み

飯舘村教育委員会教育長 広瀬要人

1

飯舘村のプロフィール

- 人口→6200人(震災後6000人を割る)
- 世帯数 →約1700世帯(震災後3000世帯を越す)
- 主な産業→米、野菜、花卉、和牛、石材等を主たる産業とする
- 村づくりの理念(考え方)→までい
- 日本で最も美しい村連合に加盟(平成22年)
- 東日本大震災の原発事故により全村避難(平成23年4月)

2

“までい”とは

- 古語の「まで」(真手)に由来する。
- 相馬地方の方言で「手間暇惜まず」「丁寧」「手間暇をかけて」「心を込めて」等の意味。

- ①人と地域のつながりを“までい”に
- ②からだと大地を“までい”に
- ③家族の絆を“までい”に
- ④「食」と「農」を“までい”に
- ⑤人づくりを“までい”に

3

「日本で最も美しい村連合」に加盟 の村飯舘

- 豊かな自然、厚い人情、満天の星空
飯舘村はゆっくりゆっくりと時間が流れている。
- 飯舘村は“母親の母胎のような村”という人もいる。
- 小さくとも輝くオンリーワンを持つ農山村が、自らの町や村に誇りを持ち、自立したまちづくりをしていこうという連合体。現在49町村が加盟している。

4



5



6



大いなる田舎飯舘村に放射能が降った

大いなる田舎飯舘村に放射能が降った



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18

大いなる田舎飯館村に放射能が降った



大いなる田舎飯館村に放射能が降った

震災直後1週間の飯館村

【2011年(平成23年)】

① 3月11日

- ・三陸沖でM9.0の地震発生。飯館村震度6強。(14:46)
- ・飯館村災害対策本部設置する。(14:55)
- ・福島第1原発から半径3km以内に避難指示、3~10km以内の人に屋内待避指示出される。(21:23)

19

② 3月12日

- ・東京電力第一原発1号機で水素爆発。(15:36)
- ・東京電力第一原発より半径20km圏内に避難指示出される。(18:25)

③ 3月13日

- ・南相馬市や双葉郡の町村より700近くの人が飯館村に避難してくる。村内3カ所に避難所設置する。

20



21

④ 3月14日

- ・東京電力第一原発3号機で水素爆発。(11:01)
- ・飯館村への避難者は1000人近くまで増え、避難所を4カ所に増やす。

22

⑤ 3月15日

- ・東京電力第一原発2号機で水素爆発、4号機で火災発生する。(6:14)
- ・総理大臣記者会見、原発から10km圏内避難命令、20~30km圏内屋内待避指示出される。(11:00)
- ・飯館村での空中放射線量44.70 μ sv/h記録する。
- ・飯館村への避難者は1100人位になり、避難所を5カ所に増やす。

23



24



⑥ 3月16日

- ・飯舘村の放射線量38.70 μ sv/h記録する。
- ・飯舘村からの再避難者が増え、避難者が887人に減少する。

⑦ 3月17日

- ・最悪の場合を考え、村への避難者及び希望する村民を栃木県鹿沼市に避難させることを決定する。

25



26



27

学校再建への取り組み

【2011年(平成23年)度】

① 3月24日

- ・児童生徒及び教職員の安全と健康を担保しながら、正常な学校経営をするため村長と教育長が協議、村外に幼稚園、小学校、中学校を移設する方針を固める。

28

< 学校移設3条件 >

- 1) 放射線量の低い飯舘村に近い村外とする。
- 2) 親元から通わせる。
- 3) 子どもをバラバラにしない。

29

② 3月25日

- ・幼小中学校を隣町の川俣町に移設することを内定する。
幼稚園→川俣幼稚園、富田幼稚園へ
小学校→川俣中学校へ
中学校→県立川俣高校へ

30



大いなる田舎飯館村に放射能が降った

③ 3月28日～30日

・学校移設について関係者に対する説明会を開催する。

- 1) 飯館村教育委員会
- 2) 飯館村幼小中学校長会
- 3) 飯館村議会
- 4) 飯館村PTA連絡協議会
- 5) 飯館村全教職員
- 6) 全保護者
- 7) 川俣町、川俣町教育委員会
- 8) 県教育委員会

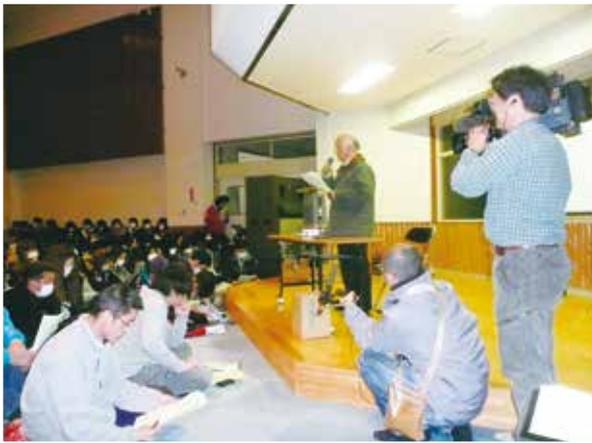
31

＜保護者説明会で出された質問・意見・要望等＞

- 1) 自主避難した市町村に転学を希望したが、受け入れてもらえなかった。どうすればよいか。
- 2) 中学校の校舎を小学生が使うので安全面で十分配慮して欲しい。
- 3) 進路指導の資料を適宜提供して欲しい。
- 4) スクリーニング、甲状腺検査、健康診断等定期的に実施して欲しい。
- 5) 保護者の経済事情は極めて悪くなった。就学援助制度の充実を図って欲しい。
- 6) 放射能に関する情報は随時開示して欲しい。

32

大いなる田舎飯館村に放射能が降った



33

避難先で学校スタート

【学校再会に当たって教職員の皆さんに】

- ・ 避難中なのでできないこと、不自由なことがたくさんあります。でも、ないもの探しはやめよう。
- ・ 今だからできること、今だからやらなければならないことを創意工夫しよう。
- ・ 減点法の教育ではなく加点法の教育を、アラ探しの教育ではなく宝探しの教育に努めよう。
- ・ 「努力はすべての扉を開く」

34

① 4月21日

- ・ 幼稚園、小学校、中学校川俣町で新学期スタートする。
- ・ 全児童、教職員のスクリーニング実施。全員異常なし。

② 4月22日

- ・ 飯館村、「計画的避難区域」に指定され、1ヶ月を目安に全村避難しなければならないことになる。

35



36



37

避難先に学校建設

- ① 平成24年4月5日
 - ・小学校の仮設校舎、川俣町に完成。本日より使用開始。
- ② 4月9日
 - ・幼稚園の仮設園舎、福島市飯野町に完成。本日より使用始。
- ③ 4月27日
 - ・飯館中学校仮設校舎、福島市飯野町に完成。本日より使用 開始。
 - ・預かり・学童保育施設、福島市飯野町に完成。本日より使用 開始。

38



39



40



41

児童生徒数の推移

- 【幼稚園】(23年度)138→ 73人(就学率53%)
(24年度)134→ 69人(就学率46%)
- 【小学校】(23年度)349→249人(就学率71%)
(24年度)349→220人(就学率63%)
- 【中学校】(23年度)175→145人(就学率83%)
(24年度)164→112人(就学率68%)
- 【全 体】(23年度)662→467人(就学率71%)
(24年度)655→401人(就学率61%)

42

大いなる田舎飯館村に放射能が降った



大いなる田舎飯舘村に放射能が降った

飯舘村の学校教育の課題

- ① 健康教育
 - ・放射線教育
 - ・体位・体力の向上
- ② 教育環境の整備
 - ・施設設備の一層の充実
 - ・スクールバスの見直し
 - ・就学援助制度の一層の充実
- ③ 家庭・地域教育力の再構築

43

原発事故から何を学んだか

- ① 本当の幸せとは何か
 - ・多くの幸せは普段の生活の中にある。
- ② 成熟社会の生き方
 - ・発展途上の社会→大量生産・大量消費、物質的豊かさ優先
 - ・成熟社会→物質的豊かさより精神的豊かさ→「までの心」が大切
- ③ 教育の偉大さ
 - ・忍耐強く秩序正しい避難民に外国メディア驚き・賞賛→教育の力
- ④ エネルギー政策の見直し
 - ・再生可能なエネルギーに要転換
 - ・エネルギーも“地産地消”で

44

被災地・被災者への支援のあり方

- ① 被災者の立場に立って
- ② 被災地の正しい理解を
 - ・マスコミだけではなく自分の目、耳、足で
 - ・正しい理解はいじめ、差別、風評被害をなくす
- ③ 生活支援から自立支援に

45

終わりに～福島に生まれて～

福島に生まれて、福島で育って、
 福島で働いて、福島で結婚して、
 福島で子供を産んで、
 福島で子どもを育てて、
 福島で孫を見て、福島でひ孫を見て、
 福島で最期を過ごす。
 それが私の夢なのです。
 あなたが福島を大好きになれば幸せです。
 (平成23年度全国高校総合文化祭“ふくしま総文”
 メッセージ)

46



飯舘村1年3カ月の記録

災害と闘うふるさとを忘れないために

原発事故にふりまわされた飯舘村の1年3カ月でした。腹が煮えくり返る思いです。しかし、グチを言っても何の解決にもなりません。前を向いて進んできました。多くの方々の温かいご支援、ご声援に助けられ・・・

飯舘村村長 菅野典雄

2011年

— 村民の健康管理対策
— 村民の仮設住宅入居

3月



▲役場に設置された村災害対策本部の様子



▲いちばん館に開設した避難所の様子

▶村内外から509人が飯舘市へ避難しました

▼比叡行政区での計画的避難住民説明会



▼新設中学校体育館で行われた幼小中学校合同入学式

▼東電による謝罪・住民説明会



◀口まわりの措置をする飯野副水大臣と村長

- 11日・午後2時46分、東北地方太平洋沖地震発生(写真①)
- 12日・午後3時36分ごろ東京電力福島第一原発1号機が水素爆発
・までいな家、いちばん館に避難所を開設(～20日)(写真②)
- 13日・草野小学校体育館に避難所を開設(～19日)
・村女性消防隊、婦人会が避難所の炊き出しを開始
- 14日・午前11時1分ごろ東京電力福島第一原発3号機が水素爆発
・飯舘小学校体育館(～17日)、臼石小学校体育館(～19日)に避難所開設
- 15日・午前6時ごろ東京電力福島第一原発2号機、4号機が水素爆発
・午後6時いちばん館前で放射線量が最大値の44.7マイクロシーベルトを記録
- 19～20日・栃木県鹿沼市避難所への避難を行う(～4月30日)(写真③)
- 21日・村水道水から高濃度の放射性物質を検出、水道水の摂取制限発令
- 22日・いちばん館でスクリーニング検査を実施
- 25日・県放射線リスクアドバイザーによる講演会
- 29日・18歳未満の子どもの対象に甲狀腺被ばく検査を実施

4月

- 1日・乳児を除き水道水の摂取制限を解除
- 11日・政府が計画的避難区域設定の方針発表
- 12日・村議会事故災害特別委員会を開催
・同委員会で今年の農作物作付見送りを決定
- 13日・村内6ヵ所で計画的避難の住民説明会開催(写真④)
・乳幼児・妊産婦が福島市の旅館吉川屋に避難開始
- 16日・福山前官房長官、平野内閣府副大臣らが来村し住民代表らへ説明
- 20日・飯舘中学校で幼小中学校の合同入学式(写真⑤)
- 21日・川俣町内の幼・中・高施設で幼小中学校の授業再開
- 22日・政府が村全域を計画的避難区域に指定
- 29日・各行政区集会所で村災害救援見舞金現金給付
- 30日・東電が住民説明会を開催し副社長が謝罪(写真⑥)

5月

- 9日・村の避難計画書を県に提出(写真⑦)
- 10日・乳児の水道水摂取制限解除
・乳幼児・妊産婦世帯にいちばん館で避難説明会開催
- 15日・計画的避難に伴う避難者の第1陣が避難、吉倉公務員宿舍入居開始
- 17日・国が村内9事業所の事業継続を承認
- 18日・相倉飯舘校が福島県教育センターで始業式
- 21日・一般世帯を対象に避難説明会を開催
- 23日・旅館、ホテル等の避難先からスクールバス運行開始
- 25日・第5回村議会臨時会で役場飯野出張所設置条例、いいたて全村見守り隊関係予算等可決
- 28日・飯野農林水産大臣が来村、農地土壌除染技術開発の実証実験開始(写真⑧)
- 30日・村と福島市間で支援協定書を締結



大いなる田舎飯館村に放射能が降った

大いなる田舎飯館村に放射能が降った

- 6月**
- 1日・福島市飯野町に村役場飯野出張所開設
 - 5日・国見・上野台仮設住宅入居開始
 - 6日・「いいたて全村見守り隊」が役場臨時職員として村内の防犯パトロールを開始(写真⑩)
 - 11日・国見・大木戸仮設住宅入居開始
 - 21日・村議会が福島市飯野町移転等を可決し、6月定例議会が開会
 - 22日・飯館村役場機能を飯野出張所に移転、飯野出張所前駐車場で開所式(写真⑩)
 - 28日・避難地域を対象とした牛のセリが終了



⑩見守り隊と警察による合同パトロールの様子

- 7月**
- 1日・相馬市西工業団地仮設住宅入居開始(写真⑪)
 - 2日・内部被ばく先行検査(千葉県放医研)
 - 7日・東京節三宅村長が職員に講話
 - 10日・旧飯野小仮設住宅入居開始
 - 15日・村土壤除染アドバイザー選任
 - 18日・村内で死亡事故発生、死亡事故ゼロが1799日でストップ
 - 21日・ホームセキュリティ設置開始
 - 23日・旧明治小仮設住宅、旧松川小仮設住宅入居開始
 - 26日・4歳以上の子どもの内部被ばく検査開始(7月29日、8月3日、8日、11日、16日、18日にも実施)(茨城県東海村)
 - 28日・松川第一仮設住宅入居開始
 - 31日・松川第二仮設住宅、伊達東仮設住宅入居開始
・「がんばっぺ!ホコ天」飯館・飯野復興祭開催(写真⑫)



⑪仮設住宅入居の様子(相馬飯館)



▲飯野出張所開所式

- 8月**
- 1日・農地の代かき等土壤除染実証試験実施
 - 6日・村内企業・見守り隊への健康調査を実施
 - 8日・第1回飯館村未来への翼プロジェクト事業(中学生によるドイツ研修)実施(~17日)(写真⑬)
 - 9日・農地の転作牧草はぎ取りによる除染実証試験実施
・まていな復興プラン庁内検討委員会発足
 - 10日・元山古志村長・中島忠美氏講演会開催
 - 16日・村民100人対象内部被ばく検査(第2回18日)(茨城県東海村)
 - 23日・水田土壤攪拌、強制落水試験実施
 - 25日・放射性物質除去実験ひまわり焼却試験
 - 30日・固形剤散布の表土はぎ取り試験実施



▼「がんばっぺ!ホコ天」で演奏する「虎捕太鼓」

- 9月**
- 3日・健康づくり支援プロジェクトチームが伊達東仮設住宅で健康プログラムを開始
 - 8日・比叡行政区主催による瀬戸内寂庵さんの「心のさずな説法」開催
 - 11日・まてい子育てクーポン交付式開催(第2回17日)(写真⑭)
・幼稚園が避難先園舎でミニ運動会開催
 - 12日・飯坂町に「いよしの宿いいたて」を開所
 - 16日・仮設住宅や公的宿舎で組織する自治会の「飯館村避難村民自治組織協議会」を開催
 - 18日・飯野小学校体育館で敬老会を開催
 - 19日・絆つながる「まていな一日」を松川仮設住宅で開催(写真⑮)
 - 28日・飯館村除染計画書を県に提出
 - 28~29日・伊達東仮設住宅健康づくりプログラム体力測定、採血検査
 - 30日・飯野出張所で村表彰式を開催
・いいたて見守り隊に南相馬警察署から感謝状の贈呈



⑬ドイツのエネルギー自給の村で太陽光発電のようすを見学する参加中学生



▼まてい子育てクーポン交付の様子

- 10月**
- 2日・福島市飯野学習センターでバリ島古典舞踊の慰問講演
 - 4日・相馬市、川俣町、福島市松川町に建設された村事業者用仮設施設完成式
 - 9日・18歳までの子どもを対象に甲状腺検査を実施(福島県立医科大)(11月13日までの土・日の11回、1~3月に追加検査)
 - 13日・まていな復興プラン庁内検討委員会報告書提出
 - 19日・高齢上げ住宅避難者との懇談会の開催(12月6日まで仮設住宅、公営宿舎等含み17回)
・いいたて復興計画村民会議開催
 - 23日・飯館村公民館で村消防団秋季検閲式
 - 28日・高齢者サポートセンター「あづまっぺ」が松川第一仮設住宅に開所
 - 30日・飯館中学校が川俣町中央公民館で文化祭「赤蜻蛉」を開催(写真⑯)



⑭「まていな一日」で来場者と一緒にフラダンスを踊りました



▲飯館中学校「赤蜻蛉」の発表の様子



17 4 福大生に講師を行う未来への希望が中学生

11月

- 1日・「サポートセンターあつまっぺ」で地域交流サロンと通所介護サービスを開始
- 4日・小宮行政区住民を対象に仮置き場等についての飯館村除染計画説明会を開催(第2回 11月14日、第3回 11月25日)
- 8日・村と伊達市間で工業団地敷地の無償貸与契約を締結
- 9日・未来への翼参加中学生が福大で特別授業(写真④)
・村出身絵師・中島盛夫氏の指導で小学生が川俣町の銭湯壁面を制作
- 20日・第23回福島駅伝に飯館村チーム出場
・福島県議会議員一般選挙を執行
- 26日・草野幼稚園・飯館幼稚園でおゆうぎ会を開催
- 27日・村民305人にひらた中央病院で内部被ばく検査(～3月23日まで)
- 29日・環境省による草野地区除染モデル事業説明会を開催



18 ▶自衛隊による本庁舎除染の様子

12月

- 1日・19歳以上を対象に仮設住宅や飯野学習センター等で総合健診を実施(～10日)
- 5日・食品放射能測定器の村民向け運用の開始
- 7日・国の除染活動の拠点とするため役場本庁舎の自衛隊による除染活動開始(～18日)(写真④)
- 8日・いいたて復興計画村民会議が復興計画の答申書を村に提出
- 13日・相馬飯館校生と福大生がクリスマス交流会開催
- 16日・村議会が「復興計画」や「放射性物質の仮置き場の方針」等を議決
・政府が東京電力福島第一原発の原子炉が冷温停止状態になったと判断し、事故収束に向けた工程表ステップ2の完了を宣言
- 19日・環境省による草野地区除染モデル事業開始
- 24日・村小学校と村外の小学校へ転校した小学6年生による沖縄でのまていの旅実施(～27日)
- 25日・川俣町中央公民館で22年度幼稚園小学校合同卒園卒業式(写真④)
- 27日・第1回除染に関する組織立ち上げ会議開催
・農地除染実証事業に関する農業者との意見交換会



19 4 修了証書を受け取る22年



20 ▶成人式で同級生たちと互いの成人を祝いました

1月

- 4日・移動式ホールボディカウンタでの内部被ばく検査(～28日)(飯野出張所)
- 8日・24年飯館村消防出初式
・24年飯館村成人式が開催され、新成人が全国から届けられた振袖を着て参加(写真④)
- 17日・常陸宮様、華子様両殿下が松川仮設住宅を訪問
- 19日・平野文部科学大臣が小学校を視察
- 24日・放射線リスク講演会開催
- 26日・飯館幼稚園で線量計配布式(0～15歳までの子どもや妊婦のいる約500世帯対象に配布)
- 28日・松川仮設住宅に村直売所松川店が開所(写真④)
- 29日・福島駅前広場等で開催の「絆つながる『ふくしまの春』」に佐須「虎捕太鼓」、比叢「三匹獅子舞」が出演
- 30日・村民250人に内部被ばく検査(～2月9日)(茨城県東海村)



21 4 村直売所開店の様子

2月

- 7日・福島市2ヵ所、伊達市、相馬市、川俣町の計5ヵ所で住民懇談会開催(～26日)
- 8日・第1回村行政機構改革審議会開催
- 10日・伊達市、相馬市、福島市飯野町で村民民税等申告相談開始
- 12日・飯坂町でいいたて村民ふれあい集会を開催し、村民およそ1,100人が参加(写真④)
・村災害救援見舞金現金給付(2回目)
- 13日・村、村議会が東電福島第一原発事故に伴う除染並びに復興等に関する要望書を内閣総理大臣らに提出
- 22日・村議会特別委員会が会津若松市のバイオマス発電施設視察
- 27日・第1回いいたてまていな復興計画推進委員会開催
- 29日・川俣自治会「ぎつつきの会」設立総会開催



22 ▶ふれあい集会で再会を喜びました



大いなる田舎飯館村に放射能が降った

大いなる田舎飯館村に放射能が降った

2012年

- 3月**
- 1日・福島学院大学で相模飯館校卒業式
・「いやしの宿いいたて」の利用者が1万人を達成
 - 3日・村消防団、女性消防隊、南相馬消防署飯館分署職員らが仮設住宅を防火訪問
 - 11日・熊主催の「3.11ふくしま復興の誓い」に村の子どもたちが参加(写真図)
 - 13日・飯館中学校が川俣中央公民館で卒業式
 - 16日・草野・飯館幼稚園が避難先の幼稚園園舎で修了式
 - 17日・むし歯ゼロの子表彰式・内部被ばく検査についての子育て講演会を開催
 - 23日・環境省による草野地区除染モデル事業結果説明会開催
・村小学校在川俣中学校体育館で合同卒業式
 - 24日・第2回飯館村未来への翼プロジェクト事業(中学生によるドイツ研修)実施(～31日)(写真図)
・村クリアセンターで放射性物質の一時保管場所見学会実施
 - 31日・やまゆり保育所修了式



飯館中学校の卒業式の様子

▶第2回いいたて未来への翼事業でドイツの子どもたちとの交流の様子



- 4月**
- 3日・政府から村の避難指示区域の見直し案について説明
 - 6日・川俣町に建設した小学校仮設校舎で草野・飯館・白石小学校入学式(写真図)
・飯館中学校が川俣中央公民館で入学式
 - 9日・福島市飯野町に建設した仮設園舎で草野・飯館幼稚園入園式
・小宮・長湊地区農地モデル除染開始
・伊達市、相馬市、福島市で避難区域見直しに関する懇談会開始(～12日)
 - 17日・草野・飯館幼稚園仮設園舎開園式(写真図)
 - 20日・草野・飯館・白石小学校仮設校舎開校式
 - 21日・世界の放射線専門家との直接対話集会開催
 - 22日・飯館村公民館で村消防団春季検閲式
 - 25日・第3回村議会臨時会でホールボディカウンタ購入予算等可決
・長湊行政区との避難区域見直しに関する意見交換会



▲仮設校舎での草野・飯館・白石小学校入学式

- 5月**
- 1日・巖平行政区との避難区域見直しに関する意見交換会
 - 2日・比叡行政区との避難区域見直しに関する意見交換会
 - 7日・比叡行政区が村に対し避難区域見直しについての「意見書」提出
 - 9日・平成24年度除染実施行政区に対する「飯館村除染にかかる説明会」開催(～16日)(写真図)
 - 11日・巖平行政区が村、村議会に対し「避難区域見直しに係る陳情書」提出
・有害鳥獣捕獲隊編成会議開催
・滝下地区との避難区域見直しに関する意見交換会
 - 14日・第4回村議会臨時会で全戸に配布する携帯型放射線測定器の購入予算等可決
 - 15日・長湊行政区が村に対し「除染並びに区域見直しに伴う生活保障に関する要望書」提出
 - 24日・東電賠償法律講演会
・16歳以上を対象に仮設住宅や飯館学習センター等で総合健診を実施(～6月3日)
 - 28日・前田・八和木行政区が村に対し「要望書」提出
 - 30日・巖平行政区の「避難区域見直しに係る陳情書」に対し、国、村、村議会が回答書提出

▶飯野・飯館幼稚園開園式の様子



▼平成24年度実施行政区への除染の住民説明会が開催されました(飯館町行政区)



- 6月**
- 1日・第1回いいたて健康リスクコミュニケーション推進委員会開催
 - 5日・長湊行政区の「除染並びに区域見直しに伴う生活保障に関する要望書」に対し、村が回答書提出
 - 6日・村が前田・八和木行政区の「要望書」に対する回答書提出
 - 10日・南相馬飯館自治会(仮称)設立準備会開催
 - 11日・村が「避難指示区域の見直し」に係る飯館村の方針決定について通知文を政府原子力災害対策本部に提出(写真図)

▶通知文は原子力災害対策本部の担当者、村長の代表者から直接手渡されました





広瀬要人氏 講演会 アンケート

● 今回の講演会に参加された理由等をご記入ください。

- 学校教育に興味があったことと、村づくりに関心があった為、参加しました。
- 広域避難者支援にボランティアとして携わっていたため、震災に対する知識を増やし、皆さんに寄り添う糧にしたいと考えたため。
- 福島原発事故について正しく知りたい、実際に被害に遭われた現地の方々の生の声をきちんとお聞きしたいという思いで参加させて頂きました。
- 福島の現状について聞きたいから。飯舘村に興味があったから。
- 以前に宮城県、岩手県の被災地を見学し、情報を集めていたが、一番の被害である福島県の被災地の情報等を聴きたく参加させて頂きました。
- 子どもにとって何が幸せなのか、判断する材料を得たい。
- 福島のことを忘れないための機会として参加しました。
- 2012年の夏に被災地（福島）の動物保護団体でボランティアをした際に、飯舘村に残されたペットたちにエサをあげるため飯舘村に訪問したため。そこで見た景色が忘れられません。
- 1回目の講師の方が、是非2回目の方の話を聴いて欲しいと言われたから。また、飯舘村そのものに興味があったから。
- 飯舘村に震災後に何度か行くことがあり、教育長さんの話を伺いたいと思いました。
- 原発事故に関わる見えない実態をより広く知るため。

● 講演会のご感想、ご意見等をご記入ください。

- 放射線教育の難しさが分かった。
- 放射線について知識が浅い方や関心がなくなりつつある方は全国的に少なくないと思うので、放射線教育をローカルに留めるのではなく、全国で行なうべきという考え方に共感しました。ただ、その方法に偏りが出ないよう国で決めることが必要なのではと考えます。川俣で生徒を受け入れてもらい、その時に「できないことを考えるのではなく、今だからできることを創意工夫する、宝もの（探し？）教育を」と先生方に広瀬さんが提示されたお話、素敵だなと思いました。
- 震災当日のお話から避難の状況、村外での学校の再建のご努力に至るまで様々な課題についてお話をお聞きすることができ、ありがとうございました。「多くの災害が皆、一致団結して向かえるのに、原発については家族の中でさえ意識が分かれ、絆が分断されていく」ということの難しさ、困難さ、また「エネルギーも地産地消で」というお話が非常に心に残りました。これからも考え続けていくこと、知り続けていくことを忘れてはならないのだという思いをあらためて強くしました。
- 本当に心に迫るお話でした。私には原発事故について「直接の経験」はありません。でも、今日の講演会に参加したことで、広瀬さんの経験のほんの少しでも共有し、「自分ごと」として考える・行動する一人になる努力をしていきたいと思いました。
- 現場でひとつひとつ取り組まれ、前に進んでこられたことが言葉やお話からにじみ出て、何より尊いものを感じまし



広瀬要人氏 講演会 アンケート

た。この状況だからこそ、本質的な“までい”にいきつくことになる。改めて気づかされた気持ちです。ふくしま総文のメッセージはすばらしいですね。全国の場所場所で自らの地をあてはめて読まれてほしいと思いました。

●前回、今回のお二人の話で自分も同じ立場にあることが解った。今まで自分は被害者ではないと思っていたのは間違いだと感じた。

●知らなかった現状を聞いて良かった話がたくさんあった。

●被災をして、避難をして、それで解決なのではなく、そこから派生してくる被害が多くあり、被災者の立場に立って、この問題を解決するためにはどう行動をしていけばよいか、改めて気付かされた思いになりました。

●飯舘村の教育のあり方・方針を聴いて良くわかったが、問題はこれからどのように変わっていくかシミュレーションが立たないように思う。子どもたちが少なくなっている現状をもっと政府に訴えていったらどうか。村を訪ねてみないと我々には分からないことであるが、最後に話された「私の夢」の詩の内容をどう実践していくか・・・かなり困難なテーマに思える。美術館の絵でさえ福島に貸し出しを渋るという話も聞いているが、子どもたちの教育は大切である。

●知らないことがたくさんあることに気がつきました。全てのお話がとても勉強になりました。被災地には私たちが知らない事実がたくさんあり、また新たな取り組みがなされているということに少し安心しました。“私たちには何ができるんだろう”とまた考えさせられました。

●広瀬先生のご苦勞を知れてよかった。また一年後どうなったのかお話を聞きたいと思った。

●刻々と変わっていく状況に刻々と対処する光景がよく見えました。リーダーの力を感しました。

●飯舘村の震災前の様子、原発事故の経過、今の取り組みをわかりやすくご説明いただき、とても貴重な機会となりました。

●人心を纏め原発事故以前の心的状態に戻すには、何かまだ不足しているようにとれます。立ち直るにはまだ時間を要するのではないのでしょうか。改めて原発事故の傷の深さが解された。より正しい放射能についての知識の共有が必要ではないのでしょうか。